AFTER JOCV
それぞれの歩き方

# 「蚕は一生稽古」両国の先達の背中を追い、学び、抗い続ける

浅井 広大（あさい ひろお）さん
2012年度3次隊／村落開発普及員／ネパール
自然塾寺子屋（群馬県甘楽町）で技術補完研修を受けた後、ネパールで活動。帰国後、地域おこし協力隊として甘楽町、富岡市で活動を行い、2016年に養蚕農家として新規参入。現在、養蚕体験施設「大丸屋」の管理人も務めながら、養蚕の普及に務める。

ネパールでの協力隊活動の中で、自分は数多くの農家の方と出会い、ともに汗をかき、活動を支えてもらいました。主な活動は、キノコ栽培技術の普及、牛舎改善、現地篤農家の技術・経営方法紹介などです。農家の方との信頼関係づくりが最初の築くべき柱となりますが、その重要性を教えてくれたのは、派遣前研修でお世話になった群馬県甘楽富岡地域の農家の方たちでした。

自分は椎茸農家の方にお世話になりましたが、ちょうどその時、管内の椎茸農家の方は、前年に起きた東日本大震災の原発事故の影響で、出荷ができない苦境に陥っていました。にもかかわらず、ともに汗をかきながら、作業をご一緒させていただくにつれて、技術的なことは勿論、経営的な情報まで教えていただけるようになりました。また、お一人から数珠つなぎにご紹介いただき、たくさんの農家の方からお話をうかがうことができ、驚きと同時にありがたみを感じました。

ネパールの農家の生き様や佇まいには、尊敬すべき点が数多くあった。

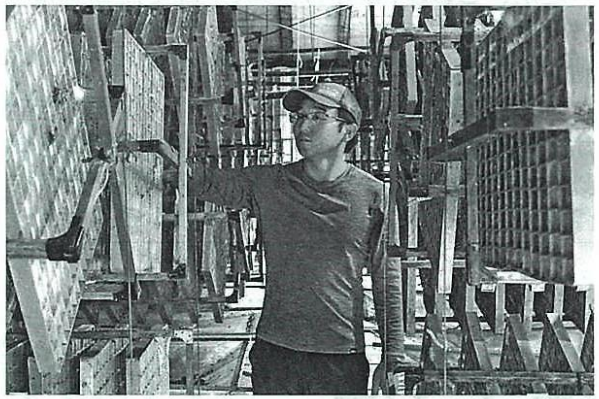
「いかにして農家の懐に入るか」。研修で再三問われたことを、ネパールでも自身に問い続けながら活動していくなかで、少しずつネパールの農家の方と打ち解けることができ、彼等の本音や不安、やりたいことなどの想いに触れることができました。なかでも、若者から老人に至るまで、地域の過疎と都市部への一極集中の問題意識が強いことには、とても驚きました。また、ちょっとした農作業の合間や、夜遅く火を囲みながらの会話の中で感じたのは、彼らの土地に対する想いと責任感です。名乗るときも、「自分はどこそこの○○だ」と言い、全員が自分の生まれた村を愛し、次世代へとつないでいきます。ネパールの農家の方の生き様や佇まいには、尊敬すべき点が数多くありました。

「百のことができるからお百姓」というのは良く言ったものです。自分の身体一つで自然資源から道具をつくり、そこから仕事や生活に必要なものを作り出す彼等の姿に私は憧れを抱くようになりました。そして、その姿は、原発事故の最中でも何とかその地で奮闘されていた甘楽富岡地域の農家の方たちの姿と重なりました。

自分は帰国後、甘楽富岡地域に戻り、養蚕農家として独立しましたが、この道を歩めたのは、日本・ネパール両国の農家の方との出会いがあればこそです。

そして、今度は自分がこの土地に責任感を持ち、次世代へ豊かな社会をつないでいく番になりました。

養蚕農家の師匠は言います。「蚕は一生稽古（けいこ）」。良くも悪くも、目まぐるしいスピードで変わっていく世の中であるからこそ、両国の先達の背中を追って、学び続ける、抗い続ける姿勢を堅持したいと思います。


お蚕がしっかり繭を作っているか確認するのも作業のひとつ。